

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	李 超 (Li Chao)
論文題目	From “Place” to “Space”: Women's Growth in Doris Lessing's Works (「場所」から「空間」へ — ドリス・レッシング作品における女性の成長)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>英国のノーベル賞作家ドリス・レッシング (1919-2013) はペルシアに生まれ、アフリカの英国植民地に育ち、二度の離婚の後帰英して作家活動を続けた。その作品は長編・短編小説、詩、戯曲、自伝、エッセイと多岐にわたり、作風も一様ではない。共産主義や、イスラム神秘主義に接近した時期があり、またフェミニスト的な主題を扱う作品、SFを思わせる作品も残している。しかしレッシング自身が特定の思想集団への帰属を否定していることもあり、彼女を一貫した観点で論じることは従来困難であるとされてきた。</p> <p>本論文の目的は、このようなレッシングを論じる上で、空間の概念と女性の成長と自立という概念の関係性が有効であると示すことである。本論文の理論的根拠となっているのは、「場所すなわち安全性であり、空間すなわち自由性である」という言葉に凝縮されるイーファー・トゥアンの『空間と場所』(1977)である。本論文は初期の長編・短編小説、中期の女性成長小説と、ディストピア小説の四作を考察の対象とする。アフリカ植民地を舞台とする作品において、入植者とくに女性入植者が家、部屋、ヴェランダなどの「場所」に安住することで自らを制約し、アフリカの広大な「空間」を危険なものとしてそれとの関係を拒むところに彼女らの困難の根本があり、その自己制約を克服することが女性の自立と成長の意味であると論じている。また最後に扱われるディストピア作品では、女性主人公は文明の崩壊に瀕した都市の中で場所を移動しながら成長し、その自立は結末で異空間へと脱出することに示されると論じている。</p> <p>序章では基本的な着眼点を説明するため、従来のレッシング作品に対する批評を概観するとともに、それらに欠如している観点、すなわちレッシング自身のアフリカ経験と成長の苦悩との関わりを指摘し、続く議論の基盤とする。</p> <p>第一章は、レッシングのデビュー作となる小説『草は歌っている』(1950)を取り上げる。白人男性植民者はアフリカの土地を「文明化」の名のもとに収奪するのみならず、配偶者をもまた囲い込むべき財産として対象化し、さらに、アフリカ人男性を女性視することで支配を確立している。小説のヒロインはこのような枠組みに囚われ、また自らも男性的支配権を揮おうとするが精神の安定を失い、アフリカ人使用人の人間性、男性性の圧倒的な引力を受けて、彼と性的関係を持つ。本論文は、結末における男性使用人による彼女の殺害は、彼女がアフリカの空間との関係を築けなかったことに起因するが、それはまたアフリカの力の勝利でもある、と論じている。</p> <p>第二章では、初期の短編集『老首長の国』(1951)から三篇を取り上げ、「場所」</p>			

と「空間」という概念を適用しつつ入植者の女性の直面する困難、性差の問題を扱っている。女性たちは夢を抱いてアフリカに到来するが、その実現の困難さのゆえに環境を非難する。「老首長ムシュランガ」では入植者の娘がアフリカの広大な空間に対して覚える不安と恐怖が語られる。「二つ目の小屋」では入植者の妻が農場の経営不振のために寂れた家屋の部屋に引きこもり、祖国の中産階級的な幸福を反芻する。

「デ・ヴェット夫妻がクルーフ農場にやってくる」の裕福な入植者の妻も手入れの行き届いた庭とヴェランダからアフリカの風景を眺望するのみである。両者とも入植者の男性的支配に従って「場所」に自らを縛り、外界の「空間」との関わりを拒んでいる。本論文は、これらの状況の根底にあるのは、レッシングが成長期に見たアフリカ植民地と、入植者の妻であった母親の記憶であるとする。そして、入植者の女性たちへの抑圧が彼女たちを包む外の状況であるとともに、彼女たちが克服できない内面の問題でもあると論じている。対照的に、英国系入植者に雇用されるアフリカーナー(オランダ起源で南アフリカに土着化した白人)たちは、入植者とアフリカ人の中間的な存在として遅しくアフリカの空間に適応していると指摘する。

第三章で取り上げる『マーサ・クエスト』(1952)はアフリカ入植者の娘であるマーサの思春期から青年期にかけての成長物語である。「クエスト」はヒロインの姓であるとともに、彼女が続ける「自分探し」をも意味する。マーサは入植者社会のジェンダー観や人種観に反発して農場から都会のアパート、事務所、クラブと場所を移動しながら自己実現を求めて不器用な奮闘を続けた結果、農場を再訪してアフリカの空間の拓がりやを再認識し、自己実現の入り口に到る。しかし、続編におけるマーサのその後の人生(離婚、共産主義者集団への加入、冷戦期における社会運動、貧困、伝染病、環境汚染と第三次世界大戦、死)を合わせて考えるとき、レッシングは女性の生き方についての安易な理想を提供することを拒んでいる、と本論文は指摘する。

第四章はディストピア小説『生存者の回想』(1974)を取り上げる。本作品の設定は近未来の文明崩壊に瀕する英国社会であり、その手法は先立つ三章でとりあげた作品がリアリズムに基づくのとは対照的に、アパートの壁を通り抜けた先の空間や、最終場面での異次元空間への脱出などファンタスティックな要素を持つ。しかし、本作品は語り手が少女エミリーの過去と成長を克明に記録する形をとり、それはレッシングが3年間養育した少女との実生活を素材としている点で自伝的でもある。エミリーの姿勢は、引きこもり、傍観者のそれから、共同体の一員、さらには指導者のそれへと変化する。本論文は、エミリーが男性的視線に抗して社会化する自己実現のプロセスと、彼女の場所の移動との密接な関連を指摘し、先立つ三章で行ったと同様、女性の成長と場所との関連という視点を導入している。その上で本章は、語り手の透徹した眼差しを通して、エミリーの成長段階における限界を提示しながらも、レッシングは次世代の女性に託す希望を提示している、と結んでいる。

結論では、以上の四章の論考を要約し、レッシングのアフリカ経験と女性の成長のテーマが密接に関わることを強調し、さらに、本論文がレッシング作品のみならず、時代・地域の相違を超えて植民地文学の読解に一石を投じる可能性に触れている。

(論文審査の結果の要旨)

ドリス・レスリングは、アフリカの英植民地で育ち、二度の離婚、共産主義への接近と離反などを経て、作家として2007年にノーベル文学賞を受賞し2013年に94歳でなくなるまで、女性の経験について精力的に執筆した。彼女が書き残した作品群は、長編小説、短編小説にとどまらず、演劇、詩、回想録、旅行記、自伝、評論と多岐にわたる上に、本人がいかなる思想集団に結び付けられることも嫌ったために、包括的にとらえることは容易ではない。また、現代作家にしばしば見られるように、学術的な研究が十分になされてきたとはいえないのも事実である。

本論文はこの女性作家の主要作品をとりあげ、植民地経験における「空間」／「場所」の概念と女性の成長というテーマの関連を解明しようと試みたものである。申請者は「空間」／「場所」という観点をイーファー・トゥアンの『空間と場所』から援用し、それをレスリング作品の分析に用いることの有効性を示している。レスリング作品へのこの概念の適用は既存の研究では行われておらず、その点に着想の独自性を見出すことができる。扱われた作品の数は、膨大なレスリング作品の中の数点に過ぎないが、レスリングの作家としての生涯の前半を代表する作品の考察を通じて、その女性論を描き出すのに概ね十分といえる。

第一章は、最初期の小説『草は歌っている』で描かれる英植民地女性の置かれた抑圧の構図を分析する中で、アフリカの広大な「空間」と、そこから植民者が切り取り、搾取する「場所」の間で女性主人公が精神の均衡を失うことを論じており、第二章以降にもつながる論点を明快に示している。アフリカの空間との親和性を持ってない女性の問題を、被支配者の位置に置かれ疎外されたアフリカ人の苦境とも並行させながら論じた点に優れた批評性を見出すことができる。しかし、自らの主張を前面に出すことに申請者の力が傾注され、文学作品としての小説の細部への目配りがやや疎かになっている。

第二章は、レスリングのアフリカ経験に基づく短編集『老首長の国』から数篇を取り上げ、女性植民者が男性植民者の支配下でアフリカの「空間」に対して恐怖と嫌悪を、それと並行して家、庭、ヴェランダといった「場所」に祖国の中産階級社会との絆という安心感を持つように仕向けられる構図を見出している。また植民者の認識を、土着化したアフリカーナーたちのそれと対照させることにより、その限界を鮮明に指摘している。このようにレスリングのアフリカ作品を貫く構図を指摘したことは作家の思想の解明を前進させたものと評価できる。

第三章は、レスリング中期の自伝的小説『マーサ・クエスト』に、植民者社会の同調圧力に対する女性主人公の不器用な反抗と未完成な自立とを見出し、女性の自己実現の主題が「場所」の移動との関わりを通じて表現されていることを丹念に論じ、最終章への橋渡しを行っている。しかし、『マーサ・クエスト』は『暴力の子供たち』と名付けられた連作の第一作にあたり、女性主人公の成長という観点からは本章は部

分的な分析にとどまり、連作の全体への考察が今後の課題として残されている。

第四章では、難解とされる小説『生存者の回想』における少女の成長とその限界を、場所の移動を手掛かりに追っている。先立つ三章がアフリカを舞台とした作品であるのに対し、『生存者の回想』は英国の大都市と思しき場所の近未来ディストピアを舞台としているために、本章では「空間」／「場所」という二項対立で作品を分析することはしていない。むしろ、女性主人公が部屋への閉じこもりから街路へ、そして若者集団の拠点へと居場所を移しながら、また集団への依存からその指導へと役割を見出しながら、自己を実現していく過程を丹念に追っている。前三章で取り上げられたリアリズム作品とは全く傾向の異なるSF的な『生存者の回想』に対しても、女性の成長という主題とヒロインが占める場所との関連を軸に分析することが可能であると示した点が、本章の価値であるといえることができる。

申請者の視座は一貫してエコフェミニズムであり、そのことが各章での主張に反復的な印象を覚えさせる。そして、主張が先立つことによって文学作品としてのテクストの機微への目配りが不足しているともいえる。また、各章での作品の分析が、プロットを追う形でなされているために、わかりやすさ、手堅さの一方で面白みに欠けるという弱点は否定できない。

しかし、本論文は現代作家として書評を超える本格的な研究の少ないレッシング作品に関し、「空間」／「場所」の概念を手掛かりに女性の成長を分析することの有効性を示した野心的な研究である。把握の困難なレッシングの諸作品を一貫した観点で捉えようとした点で本論文の持つ批評的意義は大きい。また本論文はレッシング論ではあるが、隣接分野である植民地文学研究、およびフェミニスト文学研究にも応用可能な視座を提供している。その意味で、共生文明学専攻歴史文化社会論講座の理念に十分適う研究である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年8月2日、論文内容と要約、およびそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公開可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降